社会包摂を志向したアウトリーチに取り組む演奏家の意識

―質問紙調査の分析を通して―

船越　理恵（東京藝術大学）
萩原　史織（東京藝術大学）

１．研究の背景と目的

社会包摂[1]（あるいは社会的包摂）とは、1980 年代から 90 年代にかけてヨーロッパで普及した考え方であり、我が国においては 2000 年以降、貧困問題や障害者対策など社会保障や福祉の観点からさかんに議論されてきた。子ども・若者や高齢者、障害者、在留外国人など社会的マイノリティのみならず、全ての人が取り残されることなく社会とつながり、社会参加ができるという社会包摂の考え方は、地域、職場、家庭等における人間関係の希薄化がすすむ昨今の日本社会において、ますます重視される傾向にある。

文化や芸術に係る取り組みにおいても、社会包摂へのアプローチは積極的に行われている。2015 年 5 月に閣議決定された第 4 次「文化芸術の振興に関する基本的な方針」にて「文化芸術は、子ども・若者や、高齢者、障害者、在留外国人等にも社会参加の機会をひらく社会包摂の機能を有している」と明文化されたことも後押しとなり、社会的マイノリティを含めたすべての人にとって社会参加の機会となるアートのあり方が多様に模索されてきた。東京藝術大学では 2023 年、「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」プロジェクト、通称「ART 共創拠点」において、イギリスで生まれた「社会的処方」[2]という考え方を援用した「文化的処方」の開発に着手している。「文化的処方」は、誰もが超高齢社会で「自分らしく」いられる、誰も取り残さない共生社会の実現を目指した社会包摂的な取り組みである。「文化的処方」によって、アートと福祉・医療・テクノロジーを融合させ、多様な人々と社会とを結び、人々が社会に参加していく新しい回路づくりを推進するとあり[3]、今後の動向に注目が集まるところである。

音楽に係る活動については、実演芸術の枠組みにおいて、主にアウトリーチの文脈のなかで社会包摂の課題との接続について議論がすすんできた[4]。その多くは、行政や公共ホール・公民館など芸術文化事業を担う中間支援セクターの立場において捉えられる、社会包摂を志向したアウトリーチ（以

---

[1] 社会包摂とは「社会的に弱い立場にいる人たちを排除するのではなく、包摂する社会を築いていこう」（中村 2021：40）とする考え方であり、社会包摂の対象となるのは社会的に排除され、孤立傾向にある人たちである。具体的には「貧困を抱える人たち、移民・外国人、高齢者、LGBTs、病気を抱える人、災害の被害者など、様々なマイノリティの人たち」（中村 2021：45）とされる。

[2] 西（2020）によれば、社会的処方とは社会的孤立を解決する一つの方法。患者の非医療的ニーズに目を向け、地域における多様な活動や文化サークルなどとマッチングさせることにより、患者が自律的に生きていけるように支援すると共に、ケアの持続性を高める仕組み 1980 年代、イギリス各地域で社会的処方についての取り組みは、1980 年代、イギリス各地域で始まった。

[3] 「共生社会」をつくるアートコミュニケーション共創拠点（geidai.ac.jp）

[4] 詳細は、萩原・船越（2023）にあずける。

下、社会包摂型アウトリーチ）の実施に際する課題および工夫等について検討している。たとえば永島（2023）は、行政を事業実施の主体とするアウトリーチ活動のあり方を考察する目的において、公益財団法人堺市文化振興財団が実施する社会包摂型アウトリーチに着目し、子ども食堂等での実施状況や取り組みにおける行政側の工夫や働きかけ等を明らかにしている。東京文化会館は 2020 年に『社会包摂につながるアート活動のためのガイドブック』を発刊した。内容としては平成 30 年度から開始したアートによる多元的共生社会の実現に向けた事業「Workshop Workshop!2020 on stage & legacy」にて社会包摂につながる様々な取り組みをレポートしたものである。音楽に係る事例には、社会的ハンディキャップをもった様々なコミュニティや多世代コミュニティと共に地域に根差した活動を行っている英国のオーケストラ、ボーンマス交響楽団を招聘し行った福祉施設でのワークショップや、東京文化会館がポルトガルの音楽施設「カーザ・ダ・ムジカ～Casa da Música～」との連携のもとに立ち上げた独自のミュージック・エデュケーション・プログラム「ムジカ・ピッコラ」による事業が取り上げられている[5]。

小林（2011）は、社会包摂の視点を有したアウトリーチが実施されていくことの重要性に言及し「教育や福祉の現場はややもすると閉鎖的で固定化された人間関係や枠組みの中で営まれがちであるが、アーティスト等ふだん接することのない外部の人との交流により、開かれた環境や関係性が生まれ、従来とは異なるアプローチで問題を解決することが可能」と述べた。特に、アウトリーチ活動の手法としてのワークショップについて「アーティストの援助を得て、参加者同士が意見を交換したり体験を共有したりすることにより、コミュニケーションを深めることができるという効果を有している」[6]と着目し、ワークショップを用いたアウトリーチを継続的に行うことの重要性を指摘している。

このようにアウトリーチについては、社会包摂課題への接続、ひいては社会づくりの観点において、行政団体・公共ホールなど事業主体となるセクターが旗振り役となり、あるいは梃となって、実践と議論の蓄積が積極的になされてきた。結果、アウトリーチの現在地は、社会包摂的な機能と役割を果たす実演芸術としての再評価が進んだ状況にあるといえるだろう。一方で、社会包摂型アウトリーチに関する先行研究において、まさに現場を担う演奏家に着目した議論は未だ乏しい。関連研究として社会福祉施設における音楽アウトリーチの実践に着目した湯原・石川（2022）、子ども食堂でのコンサートの意義に言及した萩原・船越（2023）が挙げられるものの、特に社会包摂課題へのアプローチを担うアウトリーチが、具体的にどのように取り組まれているかについては、ほとんど明らかにされていない。

よって筆者らは、社会包摂を志向したアウトリーチにのぞむ演奏家のありよう、すなわち実践の実態を明らかにすることを目指し、アウトリーチの経験を有する演奏家を対象とした意識調査を行った。本稿においては、実施目的において社会包摂に関する特段の言及をしていないアウトリーチ（以下、従来型アウトリーチ）と、実施目的において社会包摂の視点を有したアウトリーチ、双方の活動に対する質問の回答を比較することで、演奏家の取り組み方にどのような違いがあるのかを明らかにすることを目的とする。なお、本稿では、社会包摂に関わる課題として子どもを取り巻く困難な状況や貧困に着目する。社会包摂機能を果たす音楽アウトリーチの具体を詳らかにする端緒として、本論考を位置づけたい。

---

[5] 東京文化会館（2020）

[6] 小林（2011）

２．研究の方法

２－１．アンケートの概要と調査対象

2024 年 2 月 12 日から 2 月 24 日にかけて、オンラインにて音楽アウトリーチに関するアンケートを実施した。アンケート調査の実施にあたっては、一般財団法人「100 万人のクラシックライブ」の協力を得た。当財団法人では、2020 年より「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」（以下、子どもプロジェクト）という社会包摂型アウトリーチをスタートさせており、子ども食堂や児童家庭支援センター等の子どもにまつわる包摂的な環境の実現を志向した場におけるアウトリーチ活動を全国で展開している。

調査対象は、子どもプロジェクトでのアウトリーチと、実施目的において社会包摂に関する特段の言及をしていない従来型アウトリーチ、双方の経験を有する演奏家とし、調査対象としての条件に該当する当財団法人の登録アーティストへアンケート調査への協力を依頼した。アンケートの際には回収データの質を担保するために、アンケートページの冒頭に、調査目的と調査協力条件を記載した。回収した 85 人の回答のうち、本研究では有効回答 76 名分のデータを分析の対象とする。

アンケートの項目は《アウトリーチコンサートについて》、《子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクトについて》、《子どもの包摂的環境の実現を志向したアウトリーチコンサートについて》、《フェースシート》の 4 つのカテゴリで構成した。

《アウトリーチコンサートについて》では、従来型アウトリーチの取り組みにおいて注力していることや今後の活動継続の意志について 5 件法で回答してもらうと共に、活動を通じてのやりがいや難しさについて自由記述で回答を得た。《子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクトについて》では、子どもにまつわる包摂的な環境の実現を志向した場における実践に関する設問をまとめ、《アウトリーチコンサートについて》と同内容の質問に加え、プロジェクトの目的についての理解や、プロジェクトへの参加動機、子どもの居場所づくりに対する関心を問う質問を含めた。《子どもの包摂的環境の実現を志向したアウトリーチコンサートについて》では、主に子どもの包摂的環境の実現に対する関心やそれへの貢献に関する考えをたずねた。《フェースシート》は、回答する際に社会的のぞましさのバイアスが影響することを考慮し、最後のアンケート設問のカテゴリとして付置した上で、演奏楽器、年齢、活動歴、最終学歴等について確認した。なお、アンケートの実施にいたる過程においては、アウトリーチ経験の豊富な実演家 5 名の協力のもとにパイロット調査を行い、アンケート内容の妥当性について検証を重ねている。

表１　アンケート項目一覧

質問カテゴリ	質問項目
《アウトリーチコンサートについて》	・「プログラミングの検討」に対する注力の度合い（５件法）／具体的に取り組んでいる内容（選択式・最大３つまで） ・「参加者に関する情報収集（事前及び当日含む）」に対する注力の度合い（５件法）／具体的に取り組んでいる内容（選択式・最大３つまで） ・「本番でのコミュニケーション」に対する注力の度合い（５件法）／具体的に取り組んでいる内容（選択式・最大３つまで） ・「演奏環境の把握」に対する注力の度合い（５件法）／具体的な内容（選択式・最大３つまで） ・上記以外で注力している内容（有無）／具体的な内容（自由記述）

	・アウトリーチコンサートのために独学で取り組んでいること（選択式・複数回答可）／独学では難しいと感じることや労力がかかること（選択式・最大３つ） ・アウトリーチコンサートにおける「やりがい」（自由記述） ・アウトリーチコンサートにおける「難しさ」（自由記述） ・アウトリーチ活動の継続意思（有無）／アウトリーチ活動を継続し、活動の幅をより広げていくために勉強したいこと（自由記述）
《子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクトについて》	・100 万人のクラシックライブ「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」への出演経験（有無） ・100 万人のクラシックライブ「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」への出演歴（自由記述） ・「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」への参加動機（選択式・複数回答可） ・「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」は、子どもの居場所づくりへの関わりを通じて、子どもの包摂的環境の実現を志向した取り組みであることを知っているか（５件法） ・「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」で実施するアウトリーチに出演する際、事前に訪問先や参加者に関する情報を十分に得られていると感じているか（５件法） ・演奏を通じて子どもの居場所づくりに関わることに興味関心があるか。（５件法） ・「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト』への参加を通じて、子どもの居場所づくりに関わっていると感じるか。（５件法） ・「プログラミングの検討」に対する注力の度合い（５件法）／具体的に取り組んでいる内容（選択式・最大３つまで） ・「参加者に関する情報収集（事前及び当日含む）」に対する注力の度合い（５件法）／具体的に取り組んでいる内容（選択式・最大３つまで） ・「本番でのコミュニケーション」に対する注力の度合い（５件法）／具体的に取り組んでいる内容（選択式・最大３つまで） ・「演奏環境の把握」に対する注力の度合い（５件法）／具体的な内容（選択式・最大３つまで） ・上記以外で注力している内容（有無）／具体的な内容（自由記述） ・「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」でコンサートを行うにあたり、独学で取り組んでいること（選択式・複数回答可）／独学では難しいと感じることや労力がかかること（選択式・最大３つまで） ・子どもプロジェクトならではの「やりがい」（自由記述） ・子どもプロジェクトならではの「難しさ」（自由記述） ・子どもプロジェクトをはじめ、子どもの包摂的環境の実現を志向したコンサートに関わっていきたいか（有無）／継続的に関わっていく上で勉強したいこと（自由記述）
《子どもの包摂的環境の実現を志向したアウトリーチコンサートについて》	・子どもの包摂的環境の実現を志向する地域の子どもの居場所（子ども食堂、学習支援センター等）において、アウトリーチコンサートを展開する取り組みに興味はあるか（「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」に限らず）（５件法） ・子どもの包摂的環境の実現を志向する地域の子どもの居場所（子ども食堂、学習支援センター等）において、 アウトリーチコンサートを実施する取り組みは重要だと思うか（５件法） ・子どもの包摂的環境の実現に向けて、音楽や芸術は貢献できると考えるか（５件法）／具体的にできること、または、できないと回答した理由（自由記述） ・子どもの包摂的環境の実現に向けて、演奏家として貢献できることがあると考えるか（５件法）／具体的にできること、または、できないと回答した理由（自由記述）
《フェースシート》	・楽器種 ・年代 ・演奏家としての活動歴（〇年） ・100 万人のクラシックライブでの活動歴 ・「アウトリーチコンサート」への活動歴（〇年、〇回、差し支えなければ、100 万人のクラシックライブ以外で出演歴のある団体名） ・最終学歴（差し支えなければ）

２－２．分析の手続き

アンケートの調査項目のうち、本研究の目的に関わる設問を選定し、従来型アウトリーチにおける場合と、社会包摂型アウトリーチにおける場合の集計結果を比較分析した。具体的には、アンケートを構成する４つのカテゴリから以下２つのカテゴリ《アウトリーチコンサートについて》および《子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクトについて》に共通する設問を分析の対象とし、自由記述以外の選択回答項目を量的データとして処理し、集計を行った。両カテゴリに共通する設問は、本番に際して「プログラミングの検討」「参加者に関する情報収集」「本番でのコミュニケーション」「演奏環境の把握」それぞれにどの程度注力しているのかをたずねた項目（５段階：とても注力している／まぁまぁ注力している／どちらともいえない／あまり注力していない／注力していない）と、さらに「プログラミングの検討」「参加者に関する情報収集」「本番でのコミュニケーション」「演奏環境の把握」に注力する際、具体的に取り組んでいている内容について選択回答を要求した項目である。

３．結果

３－１　フェースシート

はじめに、回答者 76 名の年代、楽器種、演奏家としての活動歴、従来型アウトリーチの実践歴、「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」の実践歴について記載する。

回答者を年代別にみると、20 代前半が 1 名（1%）、20 代後半が 27 名（36%）、30 代前半が 22 名（29%）、30 代後半が 13 名（17%）、40 代が 12 名（16%）、50 代が 1 名（1%）であった。

楽器種でみると、ピアノが 39 名（51%）、弦楽器（Vl, Vla, Vc）が 36 名（47%）、管楽器（Fl 等）が 1 名（1%）であった。

演奏家としての活動歴は、3 年未満が 2 名（3%）、3～9 年が 23 名（30%）、10 年以上が 30 名（39%）、20 年以上が 14 名（18%）、回答なしが 7 名（9%）であった。

従来型アウトリーチの実践歴および「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」の実践歴については、以下の表の通りである（表２、表３）。従来型アウトリーチの実践歴では、累計出演回数 10～29 回と回答した割合が 30%ともっとも高かった。他方、「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」の実践歴では、累計出演回数 5 回未満と回答した割合が 49%と半数近い結果となった。

表２　従来型アウトリーチ実践歴

従来型アウトリーチ実践歴（累計出演回数）	人数	
5回未満	14名	(18%)
5～9回	8名	(11%)
10～29回	23名	(30%)
30～49回	10名	(13%)
50～99回	7名	(9%)
100回以上	7名	(9%)
回答なし/不明	7名	(9%)

表３　子どもプロジェクト実践歴

子どもプロジェクト実践歴（累計出演回数）	人数	
5回未満	37名	(49%)
5～9回	9名	(12%)
10～29回	27名	(36%)
30～49回	2名	(2%)
50～99回	1名	(1%)
100回以上	0名	(0%)
回答なし/不明	0名	(0%)

次に、子どもプロジェクトの参加動機に対する回答の集計結果は以下の通りである。

社会包摂型アウトリーチに位置づく「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」に参加した動機を質問すると、「プロジェクトの主旨に共感したから」という項目に対する回答がもっとも多く見られ（66%）、次いで「子どもを対象としたアウトリーチに参加したかったから」という項目に対する回答が 61%を占めていた。「子どもの包摂的環境の実現」や「子どもをとりまく社会課題」等のキーワードが入った項目への回答者数は必ずしも多くはなかったものの、プロジェクトの目指す方向性と主旨を理解し、共感した上で、演奏家たちがアウトリーチコンサートに望んでいることがわかる。他方で、「声をかけられたから」という項目は、半数を超える 54%に選択されている。

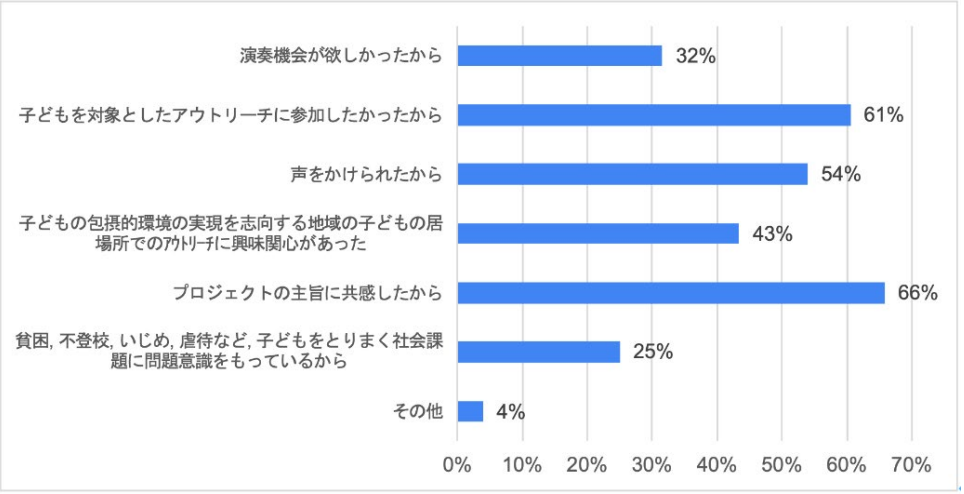


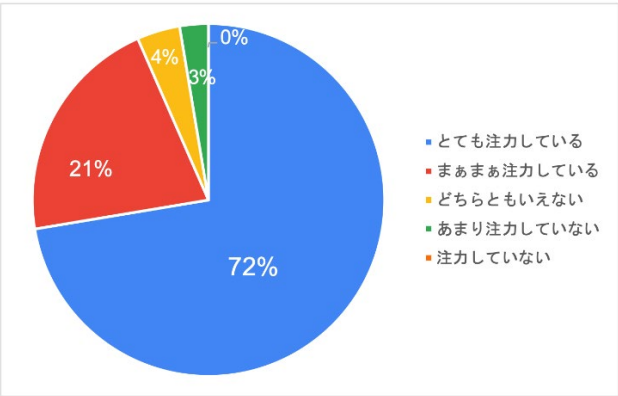
図１　「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」の参加動機

３－２　集計分析の結果

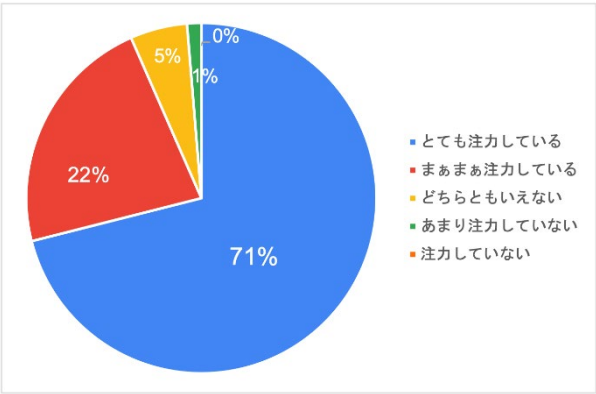
従来型アウトリーチと社会包摂型アウトリーチに位置づく子どもプロジェクトに共通して設定した設問に対する回答の集計結果は以下のとおりである。

①　プログラミングの検討に対する注力

〈従来型アウトリーチ〉



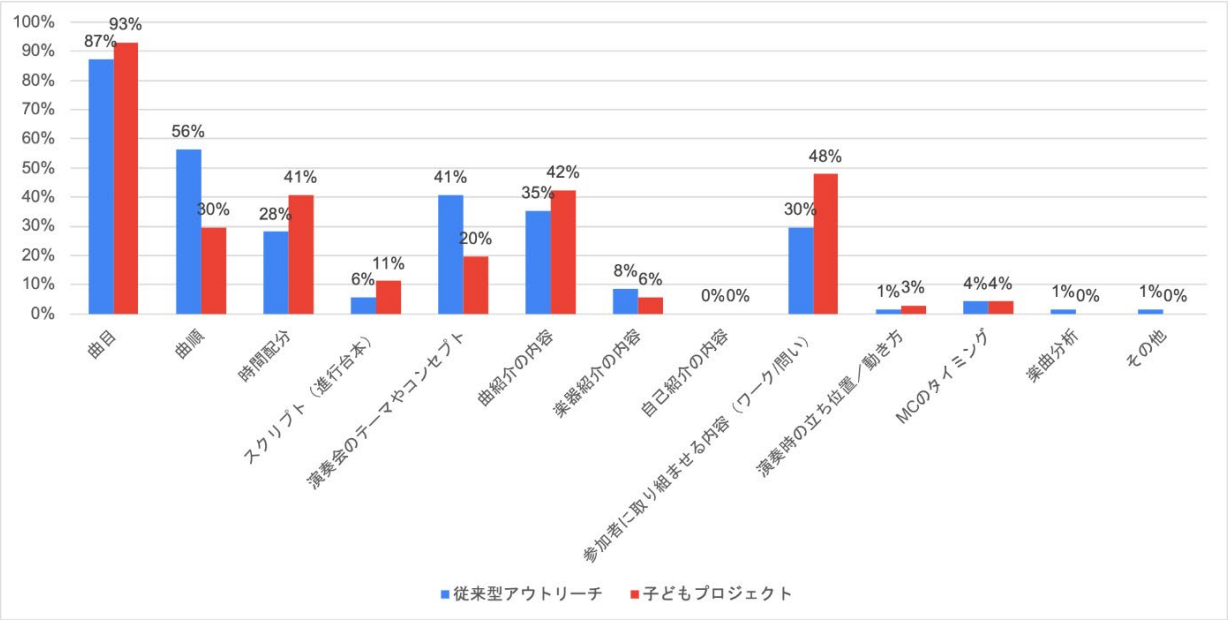
〈子どもプロジェクト〉



とても注力している	72%
まぁまぁ注力している	21%
どちらともいえない	4%
あまり注力していない	3%
注力していない	0%

とても注力している	71%
まぁまぁ注力している	22%
どちらともいえない	5%
あまり注力していない	1%
注力していない	0%

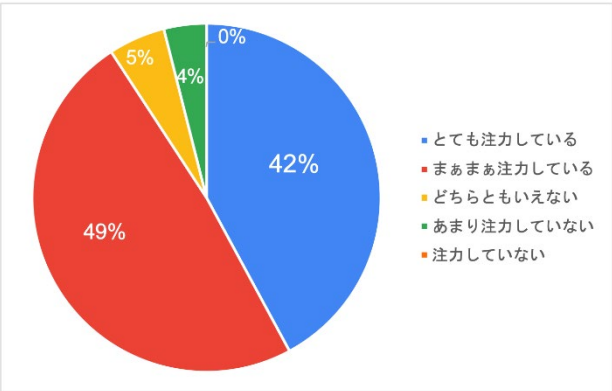
〈プログラミングの検討において具体的に取り組んでいる内容〉



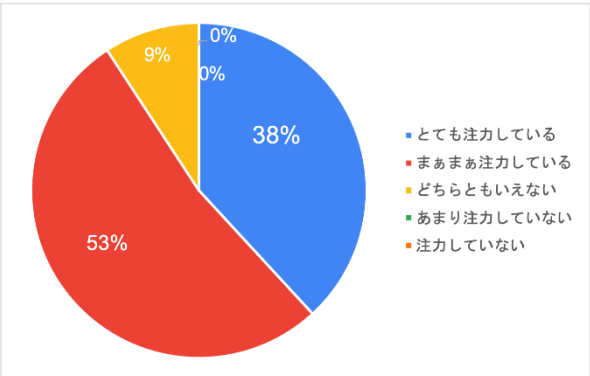
プログラミングの検討に対する注力の比率は、従来型アウトリーチ、子どもプロジェクト、両者に差は見られなかった。注力して取り組んでいる具体的な内容をみると、従来型アウトリーチ、子どもプロジェクト、ともに共通して「曲目」の検討に対する回答がもっとも多く見られる。他方で、従来型アウトリーチでは「曲順」や「演奏会のテーマやコンセプト」の回答率が高いのに対し、子どもプロジェクトでは「参加者に取り組ませる内容（ワーク/問い）」や「曲紹介の内容」「時間配分」への回答が多く見られた。

② 参加者に関する情報収集

〈従来型アウトリーチ〉



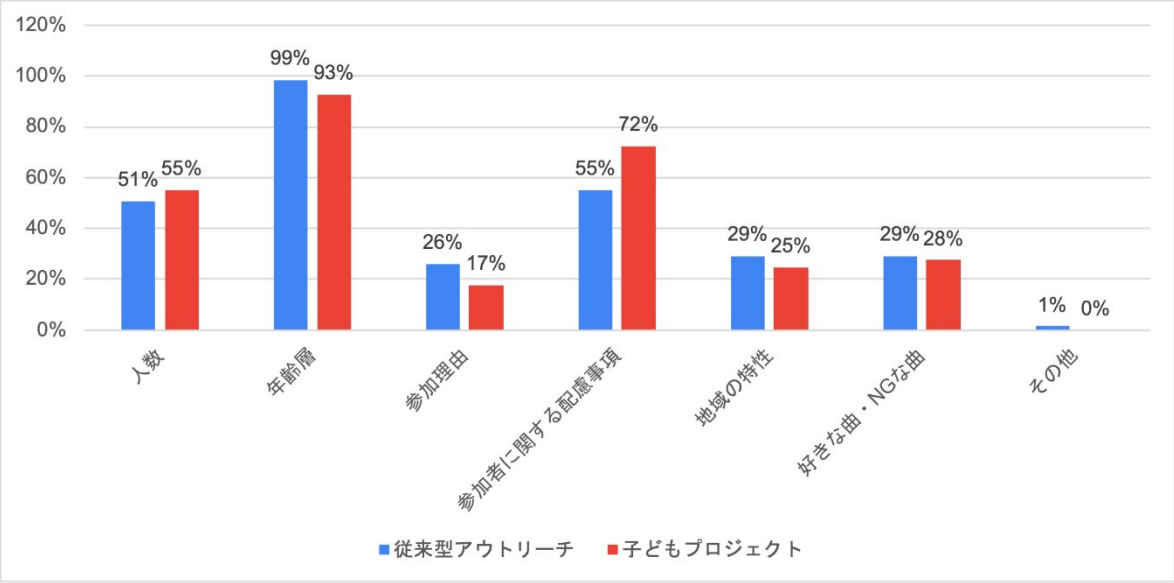
〈子どもプロジェクト〉



とても注力している	42%
まぁまぁ注力している	49%
どちらともいえない	5%
あまり注力していない	4%
注力していない	0%

とても注力している	38%
まぁまぁ注力している	53%
どちらともいえない	9%
あまり注力していない	0%
注力していない	0%

〈参加者に関する情報収集において具体的に取り組んでいる内容〉

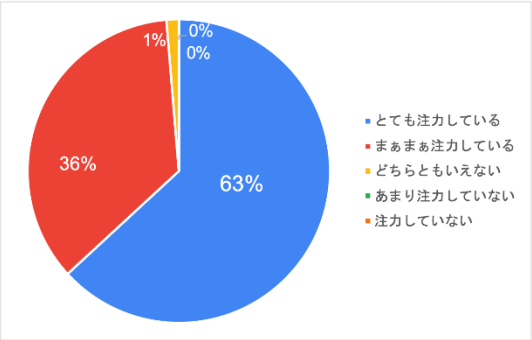


参加者に関する情報収集に対する注力の比率も、従来型アウトリーチ、子どもプロジェクト、両者に大きな差は見られなかった。ただし、子どもプロジェクトの方が従来型アウトリーチに比べ「とても注力している」と回答した割合が低いことや、従来型アウトリーチでは「あまり注力していない」という回答が見られたのに対し、子どもプロジェクトでは「どちらともいえない」という曖昧な回答の割合が増えていることなど、違いも見てとれる。

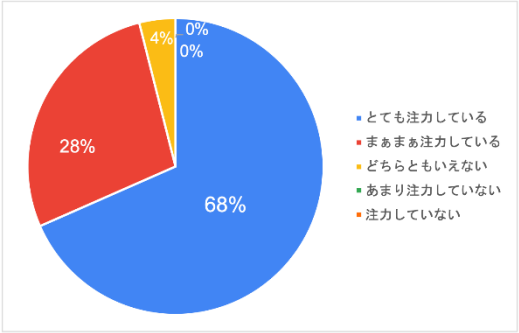
注力して取り組んでいる具体的な内容をみると、従来型アウトリーチ、子どもプロジェクト共に、「年齢層」に関する情報をもっとも重視していた。次いで、両者ともに「参加者に関する配慮事項」の回答比率が共通して高かった。もっとも、「参加者に関する配慮事項」については、割合に大きな差が見られ、特に子どもプロジェクトにおいて重視されていることがわかる。

③　本番でのコミュニケーション

〈従来型アウトリーチ〉



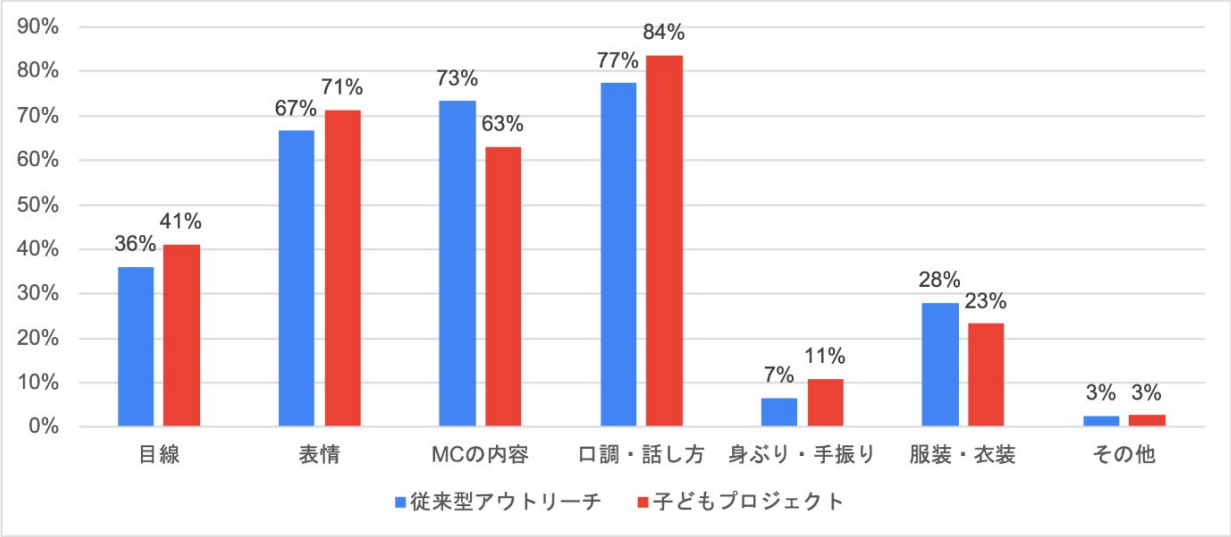
〈子どもプロジェクト〉



とても注力している	63%
まぁまぁ注力している	36%
どちらともいえない	1%
あまり注力していない	0%
注力していない	0%

とても注力している	68%
まぁまぁ注力している	28%
どちらともいえない	4%
あまり注力していない	0%
注力していない	0%

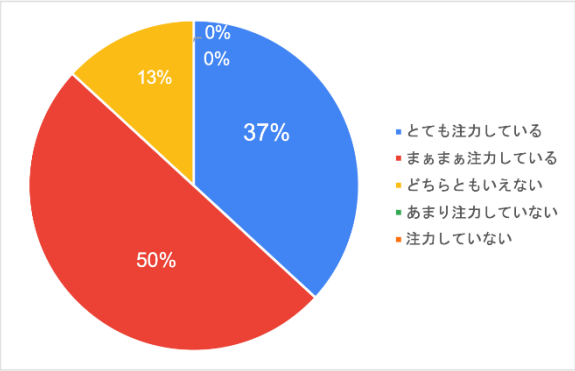
〈本場でのコミュニケーションにおいて具体的に取り組んでいる内容〉



本番でのコミュニケーションに関しては、従来型アウトリーチ、子どもプロジェクト、いずれにおいても、ほとんどの演奏家が注力していると回答した。注力して取り組んでいる具体的な内容は、共通して「口調・話し方」に対する回答比率がもっとも高く、次いで、従来型アウトリーチでは「MCの内容」、子どもプロジェクトでは「表情」に対する回答が多かった。

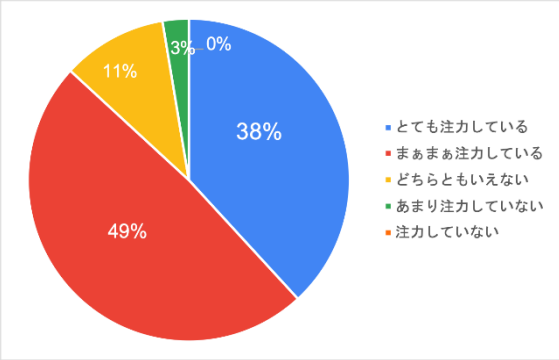
④　演奏環境の把握

〈従来型アウトリーチ〉



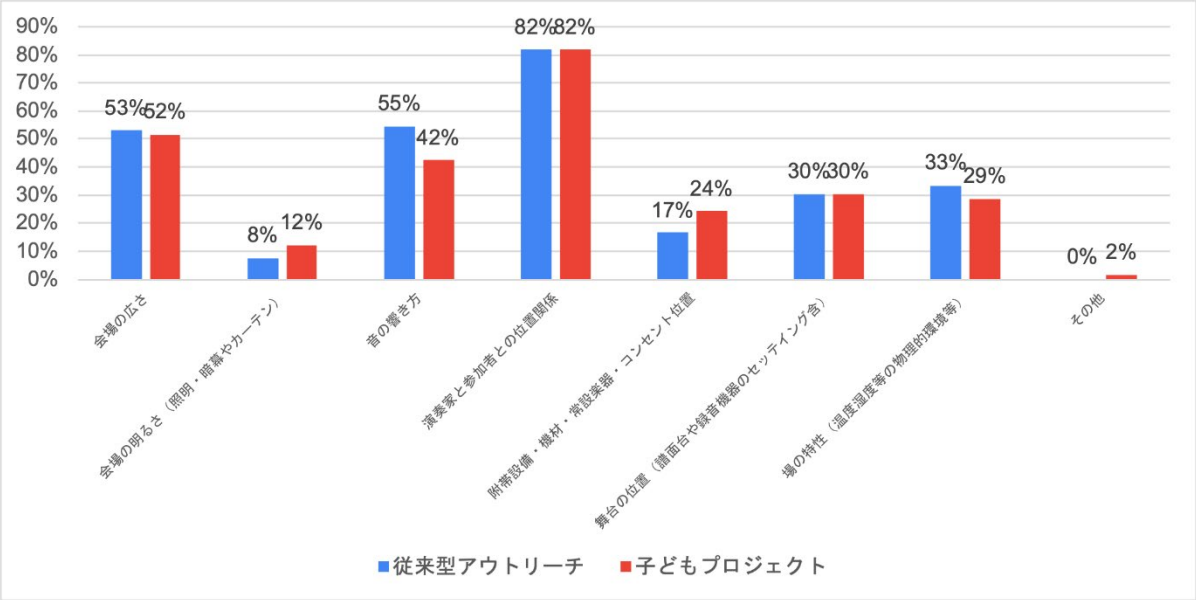
とても注力している	37%
まぁまぁ注力している	50%
どちらともいえない	13%
あまり注力していない	0%
注力していない	0%

〈子どもプロジェクト〉



とても注力している	38%
まぁまぁ注力している	49%
どちらともいえない	11%
あまり注力していない	3%
注力していない	0%

〈演奏環境の把握において具体的に取り組んでいる内容〉



演奏環境の把握に対する注力の比率について、従来型アウトリーチ、子どもプロジェクト、両者に差は見られなかった。注力して取り組んでいる具体的な内容では、両者共通して「演奏家と参加者との位置関係」に対する回答がもっとも多く、次いで、従来型アウトリーチでは「音の響き方」、子どもプロジェクトでは「会場の広さ」に対する回答比率が高かった。

３－３　考察

「プログラミングの検討」「参加者に関する情報収集」「本番でのコミュニケーション」「演奏環境の把握」全ての項目において、従来型アウトリーチと子どもプロジェクトともに「とても注力している」「まぁまぁ注力している」に回答の８割から９割が集まり、注力の程度については大きな差異が見られなかった。一方、具体的に注力していることは、従来型アウトリーチと子どもプロジェクトでは異なる傾向にあることが読み取れる結果となっており、意識の向き方に違いが見られた。

例えば、プログラミングの検討について、従来型アウトリーチでは「曲順」や「演奏会のテーマやコンセプト」に対する回答率が高く、子どもプロジェクトでは「参加者に取り組ませる内容（ワーク/問い）」や「曲紹介の内容」「時間配分」の回答比率が高かった。「演奏会のテーマやコンセプト」に対する回答が従来型アウトリーチでより多く見られたのは、演奏家自身のイメージや想いをコンサートの内容に反映させたいという意識を強くもって取り組んでいるからであろう。一方、「参加者に取り組ませる内容（ワーク/問い）」、「曲紹介の内容」、「時間配分」に対する回答が子どもプロジェクトでより多く集まっているのは、客席をいかに巻き込み、最後まで飽きさせることなく進行させていくかということに意識が向けられているためと指摘できる。

また、本番でのコミュニケーションについては、従来型アウトリーチ、子どもプロジェクト共通して、もっとも回答が多かったものは「口調・話し方」であったが、次に回答比率が高かったのは従来型アウトリーチでは「MC の内容」、子どもプロジェクトでは「表情」であった。従来型アウトリーチでは、

トークのコンテンツに関する検討に重きがおかれる傾向にある一方で、子どもプロジェクトでは表情を重視する傾向にあり、子どもが構えることなく、親しみを感じやすい雰囲気をつくることに意識が向けられていることが推察される。

演奏環境の把握ついては、従来型アウトリーチ、子どもプロジェクトに共通して、「演奏家と参加者との位置関係」に対する回答がもっとも多く見られたが、次いで、従来型アウトリーチでは「音の響き方」、子どもプロジェクトでは「会場の広さ」に対する回答比率が高かった。従来型アウトリーチにおける「音の響き方」を重視するという姿勢からは、よりよい演奏・音へのこだわりが垣間見える。一方、子どもプロジェクトにおける「会場の広さ」に注視する姿勢からは、演奏時における自身の立ち位置や動線の確保、子どもに体を動かしてもらえるスペースを捻出できるかなど、その「場」で何ができるのかという視点からアウトリーチに取り組む演奏家の姿が浮かび上がる。

このように、実施目的において社会包摂に関する特段の言及をしていない従来型アウトリーチに取り組む場合と、子どもプロジェクトに取り組む場合、双方に対する演奏家の注力の仕方を比較した結果、概して子どもプロジェクトにおいては、“何”を伝えるかよりも、“誰に向けて、どのように”伝えるかに注力の比重が置かれていることがとらえられた。子どもプロジェクトに取り組むことは、演奏家にとって、音楽を通じて参加者といかに向き合い、つながりうるのかを意識する活動になっており、ここに従来型のアウトリーチとの相違を指摘できる。

4　まとめ

本稿では、演奏家が社会包摂型アウトリーチに取り組む際の意識を明らかにすべく、社会包摂型アウトリーチとして子どもの居場所で実施されるアウトリーチに着目し、実施目的において社会包摂に関する特段の言及をしていない従来型アウトリーチに対する意識との比較を通して分析を行ってきた。分析の結果、演奏家は従来型アウトリーチとは異なる意識をもって、社会包摂型アウトリーチの実践に臨んでいることが明らかになった。それは、活動の萌芽期に定義された「日頃、芸術や文化に触れる機会の少ない市民や地域に対して働きかけ、芸術を提供」（吉本 2001）するというアウトリーチの枠組みから一歩踏み込んで、どのような対象へ、いかに働きかけるのかなど、参加者への向き合いを強く意識したものであった。これは、社会包摂型アウトリーチに取り組み、対象や目的、性格の異なる場における実践を積み重ねる中で、自身の役割に対する演奏家の意識がアップデートされていたことの表れであると解釈できる。

なお、本稿で社会包摂型アウトリーチの事例として取り上げたものは、子どもの居場所づくりに関わる実践であり、子どもを対象とする取り組みであることから、演奏家たちの回答においても「子ども」との向き合いが意識されていたように思う。具体的には、子どもであるがゆえの飽きやすさ、集中を持続させることの難しさに課題を見出し、興味を引くこと、巻き込むこと、楽しんでもらうことに注力しているといった内容である。これは一見すると、対象が子どもであることによる視点に留まっているように読み取れ、社会包摂への意識の表れとして指摘するのは難しい。しかしながら、「参加者に関する配慮事項」の情報収集に注力するへの回答比率が、従来型アウトリーチと比較して子どもプロジェクトにおいて高かったというアンケート調査結果を鑑みると、子どもをとりまく生活環境を把握し、配慮の上に実践を組み立ていく演奏家の姿が見てとれる。これは、単に子ども向けのプログラムをつくること

とは異なる意識の持ちようであり、ここに演奏家の社会包摂への意識を読み取ることができるのではないだろうか。

本研究では、演奏家が社会包摂型アウトリーチに取り組む際の意識を明らかにすることに主眼を置いた。続く研究では、今回実施したアンケート調査の「やりがい」と「課題」に関する自由記述を対象にテキスト分析を行いたい。演奏家の声を取り上げ、分析・考察することで、社会包摂の視点を有したアウトリーチにのぞむ演奏家のありように、より一層迫ることができるのではないかと考える。

引用参考文献

阿部彩（2011）『弱者の居場所がない社会―貧困・格差と社会的包摂』講談社

エリック・クリネンバーグ（2021）『集まる場所が必要だ――孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』英治出版

梶田美香（2023）「音楽アウトリーチのためのアーティスト育成プログラムの開発－長久手市文化の家との連携による実践的アプローチ－」『名古屋芸術大学研究紀要』第 44 巻、pp.149-162

上村有平・小野隆洋（2021）「音楽アウトリーチが子どもに及ぼす効果―感想文の分析から―」『山口芸術短期大学研究紀要』第 53 巻、pp.15-27

古賀弥生（2020）『芸術文化と地域づくり：アートで人とまちをしあわせに』九州大学出版会

小林美津江（2011）「公立文化施設による地域活性化 ～アウトリーチと社会的包摂～」『立法と調査』No.322、pp.86-97

砂田和道（2007）「クラシック音楽におけるアウトリーチ活動とそれに関わる音楽家養成の課題」『文化経済学』第 5 巻第 3 号、pp.87-99

東京文化会館（2020）『社会包摂につながるアート活動のためのガイドブック』

永島茜（2021）「音楽アウトリーチ研究の現在：活動が抱える課題の分析と今後の方策（田中毎実教授 退職記念号）」学校教育センター紀要（6）、pp.95-108

中村美亜（2021）「社会包摂につながる芸術とは」、九州大学ソーシャルアートラボ（編）『アートマネジメントと社会包摂―アートの現場を社会にひらく』水曜社

西智弘（2020）『社会的処方：孤立という病を地域のつながりで治す方法』学芸出版社

萩原史織・船越理恵（2023）「子どもの居場所づくりにおけるライブコンサート実施の意義 ―包摂的な環境の実現に向けて」『音楽芸術マネジメント』第 14 号、pp.11-24

野呂田理恵子（2024）『社会包摂のためのアートプログラム入門：クリエイティブな活動がひらく健康・ウェルビーイング』水曜社

湯原悦子・石川貴憲（2022）「社会福祉領域における音楽アウトリーチの効果に関する探索的研究」『日本福祉大学社会福祉論集』第 147 号、pp.59-80

吉本光宏（2001）「アートと市民・子どもをつなぐ『アウトリーチ活動』--芸術による社会サービスの可能性」『ニッセイ基礎研 REPORT』(55)、pp.2-7

渡辺由美子（2018）『子どもの貧困：未来へつなぐためにできること』水曜社

附記

本研究は JSPS 科研費（課題番号：23K00233）の助成を受けた研究の成果の一部である。

謝辞

分析方法につきましてご助言を賜りました元青山学院大学の土屋裕希乃氏に厚く御礼申し上げます。